

## 三上卓「獄中記」(附) 藤井斉宛浜勇治書簡 — 『五・一五事件』補遺

小山 俊樹

一、三上卓「獄中記」について

二、『血盟団』五・一五事件関係資料綴』について

三、藤井斉関係資料、および海軍軍法会議の資料について

四、三上卓「獄中記」翻刻

五、「藤井斉宛浜勇治書簡」翻刻

### 一、三上卓「獄中記」について

本稿は拙著『五・一五事件―海軍青年将校たちの「昭和維新」(中公新書、二〇二〇年)の執筆過程で収集した、三上卓「獄中記」および藤井斉宛書簡を紹介し、あわせて同事件に関する史料状況の一考察をめざすものである。

一九三二年（昭和七）五月一日夕刻、三上卓海軍中尉ほか海軍青年将校四名と、陸軍士官候補生五名の計九人が、永田町首相官邸に押し入り、犬養毅首相を射殺した。いわゆる五・一五事件である。

首相襲撃の状況をはじめ、青年将校の身分氏名などの事件に係る情報は、報道管制のため約一年間にわたって詳細が伏せられた。事件の概要や、撃たれた犬養首相が「今撃った男を連れて来い、よく話して聞かせるから」と語ったことなどは、事件当夜の森恪内閣書記官長談話によって公表された。これに対して、たとえば犬養首相が襲撃に際して「話せばわかる」と言ったなどの有名なやりとりは、海軍将校らが公判の被告席で語ったものである。事件の公判は当時から注目を浴び、将校らの陳述内容は様々な出版物として刊行された。これまでに首相襲撃の状況を描いた諸文献は、主として右の史料をもとにしている。

ところが首相を銃撃した三上卓海軍中尉は、右の公判供述とは別に、横須賀・大津海軍刑務所内で事件に関わる手記を著していた。それが本稿で翻刻紹介する「獄中記」である。

三上卓が事件を回顧した文章は「五・一五事件の作戦本部」（一九五四年、以下「回顧A」）、「秘録昭和血盟団前後」（一九五三年「回顧B」）などが知られる。また先述した被告席上での公判供述（一九三三年「供述C」）のほか、「匂坂春平関係文書」（『秘録五・一五事件』所収、以下「匂坂文書」）にある予審訊問調書（予審判事による取調の調書「供述D」、および自首調書（供述E））が事件審理上における三上の陳述を収める。

これに対して、本稿で示す「獄中記」は右のいずれとも内容が異なり、三上が刑務所内で記した日記を抜録している点特徴である。その日付は一九三二年五月一日、すなわち事件当日の内容から始まり、六月一二日付の事件を回顧する文章で終わっている。事件直後に記された三上の述懐は、山岸宏中尉による「問答無益」の発

声を記すなど生々しく、事件の様相や自身の心境やを正確に伝える史料として、他の追隨を許さない。

一例を挙げておこう。官邸日本間の和室で、犬養首相から「靴くらは脱いで上ったらどうぢや」と言われた三上は、どのように答えたと回顧しているか。「回顧A」「回顧B」はほぼ同文で、「回顧A」を採れば次のようになる。

「靴の御心配は後でよろしい。我々が何の為に参上したかはお解りでしょう。我々は国家の為に、貴方の一命を申し受ける。最後にたゞ一言、言い残して置きたいことをお言いなさい。それで、凡てが終り、凡てが始まる」<sup>(1)</sup>

戦後の回想において、三上は事件当時、言いたかった（が、実際には言えなかった）ことを含めて、振り返ったのであろう。回想に当事者の思いが入ることは、まああることである。

これと比較して、事件から一年ほどが経った公判において、青年将校・三上卓が該当部分について語った言葉（供述C）は、もっと簡潔な表現であった。

「靴の心配はあとでも宜いではないか」

「我々は何のために来たかは分るだろう。この際何か言ひ残すことはないか」<sup>(2)</sup>

右の供述は、広く世間に流布したため、事件現場の表現としてはよく知られているものと言えるだろう。

ただし、その後の資料状況の進展によって、三上の供述は公判時点よりもさらに遡り、事件直後に当局関係者によって採られた調書類で確認することができる。そこでは、以下のような表現となっている。

#### 予審訊問（供述D）

「靴の心配なんかは仕うでも宜い、我々が何の為に来たのか判つて居るだらう、何か云ふことがあつたら早く云へ」<sup>(3)</sup>

#### 自首調書（供述E）

「文句を云ふな、靴などどうでもいいじゃないか」<sup>(4)</sup>「何か云ふことはないか」

事件からの経過時間から考えれば、右の調書類は従来の資料中でもっとも発生時点に近く、記憶も鮮明な中で供述で、信頼性は高い。ただ、こうした調書類は、記録に残す取り調べ側が原意を損なわない程度に手を加え、表現が置き換えられることもある。

その点で、今回紹介する「獄中記」は、三上自身が獄中で事件を回想しつつ著した手記であるとみられる。調書のもととなったと考えられる同手記で、事件の部分は次のように描かれている。

「コイツ靴ナンカノ心配ハ後ニシタラドーヂヤ」

「此ノ場ニ及ンデ犬養首相トシテ何カ言ヒ残スコトアルカ」

大意として顕著な差異はないが、予審判事や憲兵隊が聴き取ってまとめた調書と比較して、三上自身の言い回しで記録されている「獄中記」の会話のトーンは、かなり異なっている。事件に近い日付の文書であり、なおかつ三上自身の言葉で綴られている史料として、その希少性は得難いものである。

そこで右の「獄中記」については、今回入手した全文を翻刻することにした。

事件当日の動向はもちろんのこと、事件後における青年将校（三上）の心情がこれほど率直に窺える資料は少ない。牧野伸顕を斃せなかった無念。獄中に届いた父の手紙。藤井斉と出会って「同志の血盟」によって「大業」を志すも、事件の経過を振り返り、やはり単身で挙に及んだほうがよかったとの後悔の念など。詳細については、本文に譲ることにしよう。

## 二、『血盟団、五・一五事件関係資料綴』について

ところで右の「獄中記」の存在は、管見の限り、事件関係文献のなかで触れているものがない。とはいえ、本史料は新出ではない。一九七八年に公開された「木内曾益関係文書」に含まれる『血盟団、五・一五事件関係資料綴』（資料番号四九、以下『資料綴』）の一部に採録されたものである。公開されてから年数が経っているが、

表題からの類推が困難なためか、目を引かなかったのかもしれない（なお同資料群の番号五〇「血盟団、五・一五事件参考資料」には、『資料綴』収録史料と同じ文書が、綴外れのような形で数点一括されている）。

木内曾益は東京地検所属で、該事件での主任検事を務めた。そのため同文書群は血盟団、五・一五、二・二六事件関係などの関係資料で構成される。『資料綴』は、おそらく血盟団、五・一五の両事件を扱う民間側裁判の進行にあたって、いくつかの証拠類を選んで頒布した印刷物をまとめたもので、当時司法関係者などに配布されたと考えられる。

参考までに『資料綴』の「目次」を左に掲げる。

## 目次

一、血盟団事件並五・一五事件顛末	一
一、海軍大尉浜勇治より海軍大尉藤井斉に宛てたる書状	三
一、三月事件図解	四
一、十月事件図解	五
一、中島信一より大川周明に宛てたる書状原稿	六
一、板垣征四郎より大川周明宛書状	八
一、真崎甚三郎より同上	九
一、小磯国昭より同上	一〇

一、歩兵大尉江崎瞳生より中島信一宛書状	一一
一、歩兵中尉中馬多太彦より大川周明宛書状	一二
一、同	一六
一、同	一七
一、武田中尉（岐阜）より同上	一九
一、運動費目に関する書面	二〇
一、出動予定労働団体及員数	二三
一、便箋	二五
一、同	二七
一、暗号符	二八
一、昭和皇政維新国家総動員法案大綱	三三
一、海軍中尉三上卓獄中記	四四
一、大川周明其他の策動資金関係調査報告	
附、所謂三月事件顛末概要（黒田検事）	五一
一、血盟団事件竝五・一五事件捜査経過報告	六七
一、安政より昭和に至る暗殺年代表	七五

今回翻刻紹介するものは、右のうち「海軍中尉三上卓獄中記」および「海軍大尉浜勇治より海軍大尉藤井齊に宛てたる書状」の二点である。ただし右の目次からもわかるように、「資料綴」全体としては、木内検事の職掌に直接関わる、控訴審に及んだ民間側被告・大川周明の資料が中心である。大川への来簡や資金調査の報告書なども収録されており、興味深い内容を多く含んでいる。

### 三、藤井齊関係資料、および海軍軍法会議の資料について

右の『資料綴』に含まれたもののうち、「海軍大尉浜勇治より海軍大尉藤井齊に宛てたる書状」も内容的に貴重なものである。

陸海軍による大規模クーデターの敢行を企図していた藤井は、海軍青年将校の中心的人物である。だが一九三二年二月五日、第一次上海事変で出征していた藤井は、上海上空を偵察飛行中に撃墜され、戦死した。もし藤井が生存していれば、五・一五事件の形態は大きく変わったとも考えられてきた。

右の点に関連して、今回紹介する浜勇治の書簡は、十月事件以降、陸軍の態度が消極的なものに変化したことを藤井に伝えている。すなわち一月二四日の時点で陸軍を巻き込むことは困難であり、もしそれを求めるならば海軍が主導権をとって、陸軍が立たざるを得ないくらいの「相当大規模の計画」「徹底的な暴動」を起こす必要がある、との見解が示されているのである。

藤井の死後、浜は三月に当局によって拘束されるが、藤井に近い立場にあった佐世保の林正義ら海軍青年将校



は、九州の陸軍部隊と共同して蹶起することを考え、東京での古賀清志海軍中尉らの襲撃計画を延期させようと図った。林らの行動は、書簡も含めて考えたとき、浜・藤井らの状況判断の延長上にあったと言えよう。

ところで、五・一五事件の首謀者は海軍所属の青年将校であったが、海軍の部内で作成されたはずの軍法会議関係史料の所在はいまだ明らかでない。同事件については陸軍・海軍の軍法会議、および民間の裁判が並行して行われていた。だが陸軍軍法会議に関しては匂坂春平（陸軍法務官）の、民間側裁判については今村力三郎（弁護士）の史料があるのに対して、これらに相当する海軍側の史料が発見されていないのである。二〇一六年に「山本孝治関係文書」（山本は海軍軍法会議検察官）の公開が始まり、論告草稿などの閲覧が可能になった。だが同文書群に裁判関係の直接的な資料はない。また全国の検察庁に残された軍法会議関係資料が国立公文書館に移管され、順次公開が進んでいる。これによって二・二六事件の裁判記録をはじめとする数多くの資料が閲覧可能となった。だが五・一五事件に関しては、海軍側判決書の一綴（今村力三郎資料として刊行済）を見るばかりである。

右の資料状況のほか、五・一五事件の証拠類についても、証拠の一覧表は『匂坂資料』に残されているが、表に挙げられた証拠原本の内容を見ることは現在できない。たとえば刊行された『匂坂資料』中に翻刻されている「藤井斉日記」も、証拠の一つ（塚野道雄海軍大尉のもとから押収されたとみられる）であるが、その典拠は匂坂自身による原本の筆写物であり、完全な翻刻ではない。事件弁護士であった林逸郎もまた、藤井日記の別部分を引証しており、当局の保管する原本をそれぞれ別に筆写したことが推測されている<sup>(5)</sup>。

今回紹介する浜勇治書簡も、また原本からの引証・謄写刷であり、「海軍法第四六号証」とあることから、海

軍当局が抑えた証拠類の一つと考えられる。これら海軍軍法会議に関わる証拠類等の現況は明らかでなく、今後の研究上における重要な課題である。

なお以下に掲げる翻刻は、原文のカタカナを平仮名とし、字体を新しいものにする。また最小限の句読点を補うなど、適宜改めたところがあることを断っておきたい。

#### 四、三上卓「獄中記」翻刻

海軍中尉三上卓日記抜萃

獄中記 於神奈川県三浦郡浦賀町大津横須賀海軍刑務所 海軍中尉三上卓

昭和七年五月十五日

素願決行の朝を神楽坂料亭松ヶ枝の階上に迎ふ

午前八時休洛浮塵を去って進発

四名（三上、黒岩、古賀、中村）

吾は黒岩と共に旅館（呉服橋龍名館）に到り昼食神田に車を馳せて謄写要具を購ひ帰来

「日本国民に檄す」の疎文を謄写すること約一時間半大約一千枚を得たり

檄文（形而下占伝）必ずしも之を要せずと雖も亦夫れ特有の効果を有するものとして敢て勞秩せり

午後二時一五分右を携へて水交社に到る

会する者横須賀の山岸、村山を合して六名なり

軍服に着換へ（吾は昨夜植久より取寄せたる大尉用新品なり）武器の分配を了し各班毎に集合地点に向ふ  
以下主として一班の行を記すへし

一班 首相官邸（一組正門 二組裏門）

二班 牧野内相邸

三班 政友会本部

四班 三銀、本

午後四時半靖国神社横奥久にて夕食を急喫し五時……一班ノ集合地点たる靖国神社境内に到り参拝を終へ概地  
に来れる陸士候五名と会し大鳥居下道路上に圓タク二台を準備し分乗

永田町に向け走る、車内にて直ちに武器分配

時に午後五時十五分

時刻稍早きを以て途上三叉路菓子店前に停車し余車を降りて「キヤラメル」二個を買ひ之を分与するが如き態  
にて「今より直行す」る旨後車（山、村外士候二名裏門裏（組））に伝へ同時に山岸より拳銃一を受取る

五時二十分進発

直路首相邸に向首す

吾れ運転手に問ふに「首相官邸玄関迄後どの位か」

答へて曰く「後百米」好し……余はこの時より拳銃を凝して運転手を恐迫せり「今から俺の言ふ通りに動け、この儘首相官邸の正門を突き抜けて正面玄関迄びったり横付けせよ」運転手は観念せしもの、如く正直に命令を準奉せり

自動車の前輪軽く玄関前の玉石を噛みて停車せし時五時二十七分

全員（五名）降車 直ちに

玄関の大扉を排して入る

この時正門の守衛は余等を望見するのみにて啞然たる態なり

即ち先づ洋館右方大広場（ホール）を搜索するも人影なく邸内広漠として出入りの処に迷ふ

平常の調査により首相は日常和館平屋にあるを知れとも和館に至る通路分明せず

漸くして一洋服人に会ひ大学副官なるを疑名して首相に面接を強要せしか応せず、直ちに恐迫行動をとれり

彼心気填倒して答へず 即ち

各所に手配して和館入口を搜索す

途上数名の洋服氏に出会ひしも（中には警視庁私服のものあり）何れも恐れて出です或は「医師なり許し給へ」と哀そし「存しませぬ」と戦慄し、或は威嚇射撃に一弾を受けたる洋服氏の如きは号泣して床上を転々せり

転、洋館右端の内奥より鍵錠を施すか如き音響を聞き板扉を蹴破りて突入すれば「来ました」と悲鳴を挙げ

つゝ逃避する男あり

この男を追ふて黒岩右廻し吾は左廻し一室の板戸を排するや余は目前食堂らしき卓子に茫然として躊躇せる老齡艘〔瘦〕軀の犬養を中心に健〔犬養健は不在、同所に巡查一名〕、同妻、婢等あるを現認せり

犬養老衰せりと雖も疏石に練磨の士たるを思はしめたるは拳銃を擬せる余を前にして「そう騒がんでも静かに話せば解るぢやないか」と言ひしことなり

即ち余は「騒がんで観念せにやならんのはお前の方ぢやないか、併し今になって文句があれば聞いてやろう」とくり返しつゝ、和館客間風に行かんとするを導きたり

「居つたぞく」

漸くにして犬養を得たる余か大声を發せしとき散搜せる同志皆相倚り客間卓子正面の座布団に座せる犬養を囲めり、

この時犬養多少狼狽の色ありしも座に就かんとする折重き口調にて曰く「靴位ひは抜いで上つたらどうぢや」余答へて曰

「こいつ靴なんかの心配は後にしたらどーぢや」

「此の場に及んで犬養首相として何か言ひ残すことあるか」

犬養將に答へんとする時山岸大声にて「問答無益、打て」と呶鳴る

吾素より問答による時間の浪費を甚たく恐るゝと雖も武人の情一言にても言はして死なしたく思ひたればなりこの時後方より侵入せる黒岩か左手を挙げて後方に避けんとする犬養の胸部を狙ひ一弾を送るや間髪を容れず

犬養の右側に立てし余は彼の頭部を狙ひ狙撃せり

即ち右こめかみ部より滴血頬を下るを確め「引揚げ」を命ず  
時に五時四十分頃なるへし

直ちに裏門より道路に出て「ガレーヂ」の自動車二を強要して麹町憲兵隊本部に馳らしむ  
途上裏門の交番に立てる巡査は揚手して我に哀を乞えり

黒岩、村山の自動車はその後警視庁及日本銀行を襲撃して帰校せり

午後五時五十二分憲兵隊本部に到りし時は牧野邸を襲撃せし第二班既に帰着し其後各班漸次憲兵隊に集結し一人も欠員なし各班殆んど抵抗なく順調に経過せしものの如きも牧野を斃し得ざりしを最も遺憾となす  
悪運強き牧野はこの日宮中に出仕して未だ帰邸せざりしと謂ふ、

憲兵隊に於ては克く善後の策を誤らす種々便宜を与へて優待せしか取調の關係上

古、中は渋谷憲分へ、士候（十二名）は牛込憲分へ送致となり

山、村、黒、三、四名は麹町憲本にありて同日夜を徹して自首調書作成のための訊問あり  
事ならざりしか如し

五月十六日

昨夜来自首調書作整のため一睡を許されず午前十時に及び漸く眠る

昨夕来夢遊の如くなるも農民団の作戦ならずして発電所襲撃も不成功に終りしもの、如く大なる効果なしと聞

く

切齒亦及はず 亦天の命か

(一) 今回最も痛感せしことは警視庁の無力無能なること及各部通信連絡の不備疎隔せることなり  
かくの如くんば首相官邸百万の警官ありとも恐らく突破容易なるへし

(二) 弱きものよ汝の名は常に生存慾旺盛なる「人間」也

「ホールドアップ」を強要せらるゝ者の無能、無神経なる顔容今に至るも彷彿として哀れを感じしむ  
(三) 理論よりも実行なり

敢然たる実力の前に於て総てを建設し或は破壊せよ

抽象的口舌の徒を排す

(四) 西田税刺客の爲め死せりと聞く

怯・雄は將に斯くの如し

最後の哀愁感をぞゝる

之亦同志清算の一過程たるへし

西田よ地下三尺 静かに眠れ

五月十七日

この日憲兵司令官秦中將と私的会見をなし中將の陸部内士官に対する弁明の辭を聞く

彼は今回の事件に到達する政治思想的必然を信せる宗教家なるも彼亦既成階級の一分子たり  
但好漢克く弁し政治的背景を有するもの、如し  
願くは自重し以て老人竝の尽忠報国然るべし

憲兵隊にはこの方面理解多き人士甚た多し

但憲兵その者を実行舞台とせる人の名前を知らず（甘かすは論するに足らず）

#### 麹町憲兵隊

荻原々正長

池田憲兵上等兵

牧野を斃す能はさりし遺憾今尚骨髓に徹す

五月十八日

午前七時起床 洗面朝食

九時憲兵隊長（大佐）来隊 別盃を挙げて吾等を祝福してくれる

卿等の心中感謝に堪へず

十時自動車にて横須賀海軍刑務所に向け護送

各車一名宛の被告に対し私服憲兵二名護衛

午後零時半刑務所着



位置

神奈川県三浦郡浦賀町大津官有地一

簡単なる取調後独房入監

本日より完全なる罪人なり

房内膝を容る、一間半四方

一偶に便器あり小大便望みの俵落荷すへし

数日臭気にて健康を害せり

五月二十五日

(前略)

本日郷里(帰省中)の父より音信あり

(五月二十五日受)

左記

冠省

今更多くを謂はず

政治の墮落を革正し皇国の基礎を恢弘せんとする目的に於ては吾等と何等変る処はなきも其の手段に於ては大いに異なるものがある、されど矢は既に弦を離れて仕舞った、取返す事は出来ぬ、お前はお前としての自己の信念を敢行した積りであらは心平らかであらう

死は一度は必ず来るもの 老幼に先後はない 今後は軍人勅語に誓條に立歸りて礼儀を失はず 卓怙の振舞  
を為さず自ら全責任を負い群に入れる年少の青年を回生せしむることにしたいものだ

お前に愛着せる老祖母は今は万事を諦めた様だ

吾亦故山に歸りて老母の奉養に努むる事に決心した、家庭の事など寸毫も意とするに足らぬ、お前は徹頭徹  
尾公明正大の態度を以って国法に服し謹慎身を持して貰いたい

昭和七年五月二十日 父 新

卓 殿

六月四日 土 雨

(前略)

回顧(運動手記)

吾幼にして無口大人の風あり

中学時代より思想宗教に多大の興趣を覚えたり

大正十二年四月海軍兵学校に入るやこの頃より人生の疑義に就き独り私かに迷ひ深更兵学校の寢室を脱して月  
下の海岸を彷徨ひしこと幾度なるを知らず哲学を涉猟し或は唯心論にあきたらずして「マルクス」に転せんとし  
て能はす日蓮に哭して法華経を唱せしか如きも当時のことなり

然れども整然として墓場の如き孤島江田島三ヶ年の生活は吾等をして純情なる型にはまりたる海軍少尉候補生

として練習艦に送れり

時に十五年の四月なり

兵学校の教育はその圧入教育（智育）に於て実に理想の海軍を目標とせり

即ち現実の海軍に関し眼に一丁字なき吾等か一度校門を出るや忽ちにして現滅の悲哀を痛感せり

その練習艦なると他艦戦たるとを問はず日本海軍（海軍士官）の現状は吾人の想像せし理想と相去る甚だ遠し  
茲に於て海軍救はざるへからず 海軍刷新の熱願を抱くに至れり

この時は吾等の願望未だ「海軍」の範圍を出てす之より嚮青年学生の思想漸く悪化せんとする頃余は思想の根源に就き疑義を有し昭和三年元旦に至り思想悪化の根本は国政財閥の墮落にあるを大悟し爾来一海軍を刷新するも日本を救ふ所以に非ず

国家の根本を是正せされは海軍の刷新亦不可能なるを念ふに至れり

但し當時に於ては漠然たる維新創業の必要を痛感せしのみなりしか同年末に到る頃明治維新史を考究するに及ひ漸く「テロ」意識濃厚となれり而して昭和<sup>マ</sup>年<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>日倫敦會議の行はるゝや軟弱夢生の為政者か内外国を毒する実情を慨するの状态甚たしく時に維握上奏のことあり余は一命を賭して左記を決意するに至れり  
即ち

財部全権帰国入京の当日（<sup>マ</sup>年<sup>マ</sup>月<sup>マ</sup>日）東京駅頭に於て財部及首相を暗殺せんと企図し之に要する拳銃同彈丸及檄文は当時乗組中の二十四駆逐隊にて既に準備したり

勿論右は余一個の単独行動に属す

然るに決行に先つ旬日某夜余が取らんとする行動は「国家的刺戟」〔一〕を与ふべく余りに微弱にして機運未だ熟せざるを思ひ慨然としてこの事を放擲したり

今にして思へは甚だ残念なる事実なり

此頃余は初めて藤井と語り彼か非凡の想魂を堅持するを知り或は水交社に或は郊外に於て憂憤国事を論するに至れり

藤井とは同郷同窓の友にして兵学校以来同志会、知新会等にて屢接触の機会あり又凡輩と異なるものあるは之を知りしも余はこの頃迄「箇漢の力」を信し天下の事必ずや一人の力にて成るべく敢て同志を求めずとの自負心を有せし為交友なかりしか爾後の想念漸く熟し真個同志の結盟に依らずんは大業成らざるを感じるに到れり藤井との交情は五年六月以来急激に意気投合し一死以て大事に当らんことを誓へり

同年九月藤井の紹介にて井上日召及四元義隆と佐賀に会して深く決する所あり

六年正月日召と再び佐世保に於て語り彼の純忠至誠に感すると共に互に赤心を披歴して直接行動に依る国民運動に非ずんば現下日本の打開不可能なるを熟語し堅く血盟せり

以下略（別に手記を書くべし）

六月十二日 日 晴

（前略）

◎五月十五日を思ふて遺恨やまず

五月十五日

吾々の襲撃決行時牧野は邸内にありしと云ふ

本日このことを知る（六月十二日）

実に遺憾このことなり実に残念千万なり

この班の指導者、古賀何をしてゐたか、敢て搜索することなく邸前を爆撃せしにとゞまる、何たる不覚ぞ、刺客五名而かも一牧野を刺し得ずして止む痛恨々々

当日の心情を今日より回想するにまことに遺憾のこと多し

吾人は別働隊（農民）に余りに依頼せり、吾人は士官候補生に余りに依頼せり、而して吾人は吾人自身に余りに興奮し策戦を誤りたり、嗚呼 事既に破る

夫の当日吾人の中果して誰か生還を思はざるの決死の士ありしや悲しい哉、進発の当初より生還自首のことを念頭におきし敗軍の卒ならさりしか

一班が首相を屠りて帰校せし時九名の者手に携ふる処未だ使用し得るの手榴弾拳銃なかりしとは言ひ得ざるべし

噫吾、この武器の最後の一弾迄何故に活用せんとせさりし

吾人の目標は警視庁襲撃による戒厳令下の「テロ」に非さりしや、戒厳令……笑止や、海陸十八名の勇士？

……東京憲兵隊自首を以て万事解決せんとは

之れ一大喜劇に非されば悲劇と云ふべきのみ、げに遺恨なり

好機再び到らず 吾党の士悉く獄せられ今や後援続かず、残念でならぬ、実に痛魂の至りだ、天吾に五月十五日をめぐまず

俺は一人でやらねはならなかった、昭和五年五月、あのときの考へが正しかったのだ、人に頼る勿れだ、信ぜずして発する勿れだ

事既に去る 天なり

遺恨十年念革命

一朝事破天日明

吾党士悉く雖滅

願七生以行天命

## 五、「藤井齊宛浜勇治書簡」翻刻

海軍大尉浜勇治より海軍大尉藤井齊に宛てたる書状（海軍法第四六号証）

（本文）（巻紙に毛筆にて書く）

拝呈、御無音に打過きました。東都の状況は下降の諸君により分明の事拝察いたします。

十月以降の陸方面の崩壊作用大体一段落附き不純分子の清算されたる形なるも小生の見るところにては陸のこの二分は必ずしも理論通りの清算にあらず。

野田氏（注・野田又男中尉）の移転は管（注・菅波三郎中尉）中心の状態となり従て西田の勢力増大、十月貴兄と会談したる当時とは大違ひなり。

以上の結果陸軍は革命的なるものに非ず荒木を頼りこれにより何事かなさむとする気分濃厚なり。

（先日宇垣上京に際し荒木との争ひに備へたる時の如き最も然り）

北、西田すら今日に於ては革命的なるものに非ず、況んや荒木に於てをや。

この徒政権を握るや軍賊にすぎざること明かなり。陣容を整へて、こちらが主動の立場にたち陸軍を活用するの外なし。陸軍をしてたゞざるを得ざらしむには相当大規模の計画が必要となると思ふ徹底的な暴動が必要だらう。

井（注・井上日召）古賀を中心として着々すゝんでゐるが自分の考へはまだ発表せぬ。現在の實力で実行可能かどうか不明だし陸軍との関係が機微だから

以上近況竝に所見、諸兄によろしく

二十四日（注・昭和七年一月二十四日） 勇治

藤井兄

(表) 佐世保市太田町一〇

田崎元武様方

藤井 齊 兄

(裏) 東京府下代々木上原一、一八九

一月二四日 濱 勇治

(中封筒) (表) 現状に対する御所見を得たし

注

(1) 三上卓「五・一五事件の作戦本部―五・一五事件をくり返すな」(『文藝春秋』「臨時増刊第二昭和メモ 讀本・現代史」一九五四年一〇月)。

(2) 時事新報社『陸海軍大公判記』(時事新報社、一九三三年、一一三頁)。

(3) 匂坂哲郎他『檢察秘録五・一五事件 匂坂資料』(角川書店、一九九〇年、第Ⅲ卷、二三四・五頁)。

(4) 前掲『匂坂資料』(同右、第Ⅰ卷、一九八九年、二二五頁)。

(5) 澤地久枝「補遺」(同右、第Ⅲ卷、七二二頁)。